

サービス・パラダイムにおける庶民金融の変革

～グラミン銀行をモデルとした一考察～

九州国際大学 村上真理

経済のサービス化は更に進展し、従来と異なる社会が形成されつつある。そこではモノからサービスへのいわゆるパラダイム・シフトが生じ、社会の論理基盤が「モノと交換価値」から「サービスと文脈価値」へと一大転換される。サービスは需要者が主導するもので、その結果、人々がより幸せを享受できるサービス化社会が実現するのである。(村松, 2025) 本研究では、このような認識を前提にバングラディシュのグラミン銀行に注目した。そして各種調査・分析等を通じて得た知見を、グラミン銀行のみならず、日本の庶民金融を担う協同組織金融機関へ、新たなビジネスとして実装することを目指すものである。

グラミン銀行は、貧困層への小口融資（マイクロファイナンス）を通じて経済的自立を促す革新的な取組みとして高く評価され、2006年にはノーベル平和賞を授与された。高い返済率を担保する仕組みは、5人組の連帯保証による「グループ貸付」や銀行スタッフが村まで出向いて貯蓄・融資の手続きを行う「移動業務」などにあるとされる。しかし、現在の同行は、事業開始から30年が経過し、従来の事業方式を大きく変えつつある。(鰐部, 2022)

翻って、筆者の勤務先にはバングラディシュからの留学生がおり、さらに地域貢献を目途に大学近傍の2つの信用金庫と包括的地域連携協定を締結している。このような関係柄、ここでは合同チームを立ち上げ、共同研究を行うこととした。その第一工程では、留学生ならびにその友人等である語学専門学校生らに協力を呼び掛け、延べ10名のバングラディシュ人に数度のヒアリングを実施したところ、いくつかの興味深い結果を得た。

最近のグラミン銀行については、例えば年利約20%という金利水準が貧困層には負担が大きいといった問題や、返済のために借金を重ねる多重債務、コミュニティ内での返済に関する雰囲気が悪い、さらには利用者の精神的不安感も少なくないといったことが指摘されている。ここでの留学生へのヒアリングからも、それらが容易に確認された。さらには貧困削減効果の限界、グラミン銀行の制度の持続可能性、小口融資への過度の依存性といった問題なども浮上している。

こうした批判はグラミン銀行の理念そのものを否定するものではないが、今後のマイクロファイナンスをどう設計し、社会といかに連携させるかという重大な問いを投げかける。それは奇しくも、顧客中心・地域密着・デジタル活用等を軸に、「付加価値の創出」「経営の透明性確保」「社会課題への貢献」といった喫緊の経営課題に直面するわが国の協同組織金融機関にも当てはまるものであろう。

以上のとおり、本研究ではグラミン銀行に代表される庶民金融の在り方を横軸に、

サービス化社会へのパラダイム・シフトを縦軸に設定した。そしてケース・スタディを通じた重畳的な検討により、わが国の庶民金融ならびに協同組織金融機関の運営へのインプリケーションを導出することを目指している。

サービス社会への変遷過程においては、いまだリサーチ・ギャップが多く見受けられる。具体的には、生活世界における行動原理に関する実証や、サービスの成果としての価値共創の把握などである。そこで本報告では、留学生へのヒアリング結果を紹介し考察を加えるとともに、近時のグラミン銀行の状況や庶民金融の社会的機能等を踏まえ、わが国の協同組織金融機関の次世代戦略について展望する。

〔参考文献〕

村松潤一・戸谷圭子（編著）「第2章 サービス化社会の課題」『サービス・イノベーション:サービス社会へのパラダイムシフト』白桃書房, 2025.

鰐部行崇「グラミン銀行は何をもたらしたのか:マイクロファイナンスによる成功者と多重債務化する人々」『アジア・アフリカ研究』62(2), アジア-アフリカ研究所, pp. 59-90, 2022.